

学会ハイライト

第81回日本皮膚科学会東部支部学術大会を終えて

(2017年9月23日(土), 24日(日)ビッグパレットふくしま)

山本 俊幸

福島県立医科大学皮膚科学 教授

はじめに

2017年9月23, 24日の両日にかけて、福島県郡山市のビッグパレットふくしまに於いて第81回日本皮膚科学会東部支部学術大会が開催されました。その前週の台風の影響を受け、金曜の朝は少し降ったものの、土日は秋晴れの快晴となってくれました。もともと東部支部は会員数も少なく、学術大会も開催地域によっては参加者が少ないところですが、今年は3カ月前に仙台で総会が開催されたので、同じ東北には来ないのではと危惧する声もありました。さらに今年から東京支部学術大会も秋開催に移行したためか思ったほど演題が集まらず、本学からの9演題を入れてようやく101演題といった有様でした。会場も郡山駅から離れている不便なところにあり、極めつけは、共催セミナーのお弁当の数を学会事務局に伝えたところ、こんなにいらぬという返事だったということを知り、多くの学会をみている人がいうのだから間違いはないだろう、やっぱり来ないのか、と正直思っていました。しかし蓋を開けてみれば、お陰様で予想を超える850名の参加者をお迎えすることができました。

本大会を担当するにあたって

以前から支部総会のあり方についてはさまざまな議論があり、ミニ総会になっているとか、各支

部の特色をどう出していくか、などの声が聞かれます。本会を引き受けるに当たって、秘かに心に期すところもあり、どうせやるなら、ありきたりの学会ではつまらないと思いました。もっというなら、前代未聞の会、伝説の会にしたいという思いもありました。随所に遊び心を加えた工夫を凝らしたつもりですが、その裏には、これが本当の臨床の学会だ、という思いがありました。とくにJDA letterには、これを読んだ先生方が郡山に来たくなるように心を込めて書きましたが、長すぎるから削るよういわれてしまいました。

学会当日

1. 招聘講演・特別講演・教育講演

招聘講演は私が留学していたドイツ国ケルン大学皮膚科のThomas Krieg教授にお願いしました(図1)。ちょうどドイツ皮膚科学会の開催と重なってしまいましたが、ぜひ行くからとおっしゃっていただき、講演当日の朝に羽田到着、翌日の夜に帰国という強行スケジュールの中、おいでいただくことができました。ちょうどプログラムを組んでいたころ、思いがけず天谷雅行先生から、米国ペンシルバニア大学のJohn Stanley教授が慶應義塾大学の特別招聘教授としてその週に来日されるので、東部支部にもご参加いただけるかもしれないというありがたいお申し出をいただきました(図2)。お陰様で、お2人のビッグネームの



図1 Thomas Krieg教授による講演。



図2 John Stanley教授による講演。

先生を海外からお迎えすることができました。特別講演は、本学からの教授陣に、「培養によらない細菌・真菌の同定」(錫谷達夫先生)、「オートファジー研究の現状と皮膚科学における可能性」(和栗聡先生)、「小児の発疹症とその合併症」(細矢光亮先生)といったテーマでご講演をいただきました。教育講演は、まず医療倫理を取り上げました。ちょうど今年から臨床研究法が施行されることもあり、「変貌する医療分野の研究倫理：皮膚科の臨床研究が関わるいくつかの場面」と題して、以前、厚生労働省で倫理指針の作成に関わられた南川一夫先生にご講演をいただきました。さらに、「悪化因子から考える皮膚疾患の病態」では、佐野栄紀先生、大塚篤司先生に、生物学的製剤や分子標的薬により誘導される皮疹を通じてその病態に迫るお話を、また「鑑別診断から考える皮膚疾患の病態」では、岡本祐之先生、大塚幹夫先生に、それぞれサルコイドーシスとリポイド類壊死症、深在性エリテマトーデスとリンパ腫について、その類似性や鑑別の考え方をお話いただきました。

2. シンポジウム

「シンポジウム1：強皮症とその類縁疾患」は、現在この分野で活躍中の若手の先生から皮膚硬化の病態について、いくつかの側面から解説していただき、肺の線維化についても本学の棟方充先生にお話をいただき、引き続いて関連する招聘講演

へと移る流れとしました。「シンポジウム2：原著に触れる旅」では最近欧州の古典皮膚科学の和訳に関わられた西岡清先生、片山一郎先生、岩月啓氏先生、横関博雄先生に、それぞれ解説をいただきました。最近は原著を読む機会が少なくなっていることがしばしば指摘されています。オリジナルの論文は、いろいろな人を介していくともの意味と異なって解釈されてしまうことが往々にしてあり、注意しなくてはいけない点だとも感じています。若い皮膚科医にもたいへん好評で、疾患が初めて記載された時代背景や、当時の大御所の洞察力・観察力に感嘆しながら古き良き時代にしばし思いを巡らす時間となりました。これまで発刊された書籍に追加分を加えて、合冊本が出版される予定とのことです。「シンポジウム3：自分で掴み取る臨床皮膚科学」は、これから成長していく若手にぜひ聞いて欲しいと思い企画しましたが、実際にはベテランの先生方も会場にたくさんいらっしゃいました。戸倉新樹先生に「本当は人に教えたくない、眼のつけどころ」、石川 治先生に「吾診から学ぶ」、片山一郎先生に「他人のエビデンスより自分の経験を：臨床もサイエンス」というタイトルでお話いただきました。なお、これらのタイトルの原型はこちらで指定したもので、戸倉先生が他人に教えたくないと思っているわけでも、石川先生が誤診の名人ということでも

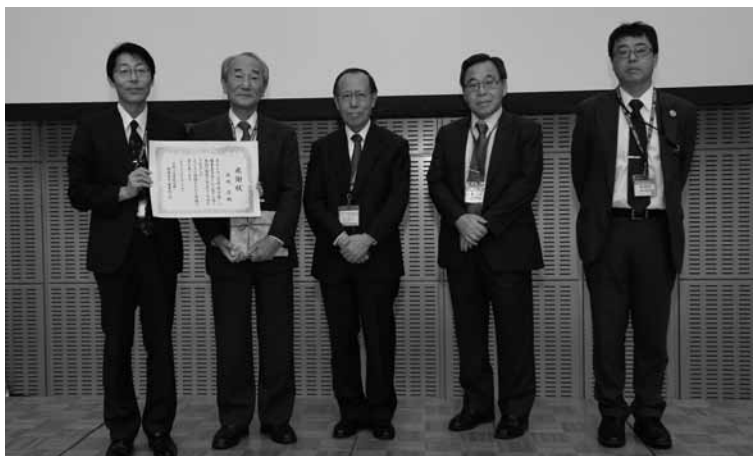


図3 『皮膚病診療』編集委員長を勇退される西岡清先生に感謝状の贈呈。

決してないということをここに明記しておきます。「シンポジウム4：皮膚病をもっと好きになるために」と題して、創刊40周年を迎えた雑誌『皮膚病診療』とのコラボ企画が実現しました。3部構成で、第一部は、これまでの歴史(西岡清先生)、記憶に残るテーマ(斎藤隆三先生)、執筆者に求めたいこと(向井秀樹先生)、などをお話いただきました。第二部は、以前の編集委員である栗原誠一先生、現advisorの清島真理子先生、田中勝先生から、最近の『皮膚病診療』について感じることや、今後より面白くするにはどうしたらよいか、などで意見を述べていただきました(図3)。田中先生には、雑誌をA4判にすること、写真をきれいに大きく載せる重要性など力説していただきました。読者の代表としてお話しいただく予定であった井上勝平先生は、残念ながら直前に体調を崩されご欠席となりました。第三部は、浅井俊弥先生から、進化する皮膚病診療と題して、今後時代に即した形でどう発展させていくかについてお話しいただきました。最後にフロアの先生からご意見をいただく時間を設けていたのですが、残念ながらあまり意見は出ませんでした。その中で種井良二先生が、editorialで若手皮膚科医に向けて、皮疹について、あるいは疾患の考え方についての解説が欲しいというご意見を出されました。それが何を意味するかはすぐにわかりましたが、その域に達するのは

並大抵ではなく(ほとんど不可能?), 編集委員にはより高いレベルが求められるを感じました。また、最近の若い世代は雑誌を購読しないことや、日本皮膚科学会雑誌にも投稿論文が少ない状況だというお話も出ました。忌憚のないご意見をもう少しいただきたいかったというのが編集委員の共通した感想でした。「シンポジウム5：皮膚疾患を巡る興味深い現象 ～ケブネル現象と自然消褪現象の病態に迫る」では、塩原哲夫先生、村田洋三先生がそれぞれの病態に関するご自身のお考えを述べられたいへん興味深く拝聴しました。私が印象に残っているのは、塩原先生がinternal Köbnerとして出してきたのがアナフィラクトイド紫斑の腸管病変だったことと、村田先生が自然消褪現象の名残としてアミロイド沈着を強調されていたことでした。

3. その他

2日目の午後は、特別企画として、当県の皮膚科診療事情を紹介させていただくセッションを設けました。震災から6年を経た現在、福島県の皮膚科診療に携わる人間が曲がりなりにも頑張っていることを、当時を振り返りながら述べさせていただきました。なお、セッションの合間には県内の観光スポットや教室員が考えたクイズに加え、うちの猫も流すよう頼んだのですが、みていただけましたでしょうか。



図4 会長パフォーマンス。



図5 懇親会で壇上に駆け上がる、マスカレードマスクをつけた裸足の女性(実は医局員)。

懇親会

福島県は、喜多方ラーメンや白河ラーメンが有名で、また蕎麦も美味しいところです。新酒品評会で金賞を受賞した福島県の日本酒も取り揃え好評でした。ちょうどタイミングよく学会の2週間前に「秘密のケンミンSHOW」というテレビ番組で福島のラーメンやスイーツを紹介してくれました。自称日本一ラーメンを食べた男で福島出身のラーメン評論家にミニ講演をお願いしました。話は変わりますが、皮膚科医の中で共通の趣味を持つ先生方の会がいろいろあるようです(たとえば歴史好きの先生たちによる戦国友の会とか)。これを機に、ラーメン友の会とか、昔のアイドルを語る会とか、できたらいいなと思いました。さて、一般演題の中から懇親会で表彰された優れた演題は以下のとおりとなりました。

Best clinical poster award：「本邦第1例目のマリーウンナ乏毛症の経験」 増田百合香先生(浜松医科大学)

Best scientific poster award：「褥瘡を予防できる新たな治療法を目指して：褥瘡モデルマウスを用いた検討」 関口明子先生(群馬大学)

会長賞

東部支部：「マイコプラズマ感染によるStevens-Johnson症候群の組織学的検討」 勝見達也先生(新潟大学)

東京支部：「掌蹠膿疱症患者における口腔マイ

クロバリオーム解析」 河野通良先生(東京歯科大学市川総合病院)

中部支部：「ツベルクリン反応施行後急性増悪した、*IL-36RN*遺伝子のヘテロ変異を認めた膿疱性乾癬の1例」 林美沙先生(大阪大学)

西部支部：「腱鞘炎・付着部炎における抗ヒストン抗体の意義に関する検討」 宮城拓也先生(琉球大学)

私は学生時代、学園祭の実行副委員長を担当していた(当時は松本伊代を有楽町のよみうりホールに呼んで前夜祭をやった)ので、イベントを企画するのはわりと好きで、楽しんでやれました。私のお見苦しいパフォーマンスについてですが、やろうかやるまいか直前まで迷いました。ただ、後ろにバックダンサーがつく以上、前もって練習してもらわなければなりません。ちょうどこのころ、尿管結石に罹ってしまいましたが、なんとか自然排石されてくれ決心がつきました。バックダンサーは、福島県立医科大学ダンスサークル部長と、そこ出身の医局員の2人をお願いしようと決めていましたが、結局伝えたのは、9月に入ってからすぐのころでした。絶対に誰にもいうなと堅く口止めして(いったらクビくらいの感じで)、医局員はもちろんのこと、司会の大塚先生、すべての進行を仕切るホテルの宴会係の方にも内緒の、超極秘ミッションでした。とにかく練習する時間がなく、3人で合わせたのは1週間前に20分くらいで、「あ



図6 学会終了時に教室スタッフと。

とは各自練習ね」といって別れました。まさにぶっつけ本番でした(図4)。

懇親会の二次会では、オーパスワンも用意しましたが、それが霞んでしまうほどの、シャトー・オーゾンヌ、シャトー・シュヴァルブラン、トリロジー(ルパンのセカンド的な存在といわれている)を並べ、イントロ当てクイズに正解しないと飲めないようにしました。味わって飲んでいただきましたでしょうか。

おわりに

当日になってみないとわからない不確定な部分がいくつもありましたが、ありがたいことに、そ

れがすべていいほうへ傾いてくれました。本当に多くの皆様のご協力をいただき無事成功裡に終えることができました。心から深謝申し上げます(図6)。来年の東部は旭川医科大学が主催されるので、“ブルゾン明美”がみられるかもしれません。会長講演で「あんたたち、この学会いっくらかったと思ってんの？ 35億」とか言って贅を尽くした学会を期待しています。

今後、福島県立医科大学は、3年後の東京オリンピックの年に、日独皮膚科学会と日本乾癬学会とを主催します。もう次は「抱きしめてTONIGHT」は出ませんので。